

## 巻 頭 言

「<sup>こうせいおそ</sup>後生畏るべし」，されど……

新入生の皆さん，入学おめでとうございます。高校への入学は，皆さんにとっては，大学入試が3年後には控えているという緊張感を伴わざるを得ないものであったでしょう。それに対し，大学の場合は，最近は就職戦線が厳しくなっていますが，それでも4年間という時間がありますし，受験勉強から解放され，自分の進路について大まかな方向付けもイメージされ，「これからはさまざまな活動に自由に取り組んでいくことが出来る」，「あれもしてみたい，これもやってみたい」，という期待感をもって入学されたのではないかと思います。

さて，皆さんは経済学部に入學しました。これから，講義や演習，さらに自主的な勉強を通じて，経済学というものを学んでいくことになります。この『経済学雑誌別冊・講義資料』は，年2回発行され，それぞれ，前期と後期に提供される講義について，内容のポイント，必要な知識やデータなどが掲載されています。その他，試験問題などの情報も含まれています。皆さんの勉学に大いに活用して下さい。

経済学は現実的な学問だと言われています。人文・社会系の学問は，すべて，多かれ少なかれ現実の人間社会の課題と格闘しているわけですが，とりわけ経済学は現実の経済問題と密接に関係する学問であると言われています。しかし，実際にはどうでしょうか。素朴な印象としては，「日本経済は長期不況に低迷しているのに，経済学はなんら有効な処方箋を出していないではないか」，「一体，経済学は役に立つのか」，というような疑問があると思います。もしかすると，新聞・雑誌等ではそういう疑問を出すことすら諦められてしまったのか，経済学に何かを期待するような記事は，最近あまり見られなくなっているような気がします。

たしかに，経済学の教科書には，「金利が下がれば投資が増える」，「不況の時には政府が公共事業などで支出を増やすことが有効である」，というようなことが書いてあるのに，現実には，日本ではゼロ金利政策が続けられているのにさっぱり効果はありませんし，財政支出も，大量の国債が累積するほど公共事業が続けられているのに，むしろ，逆効果になっているような印象です。あるいは，経済学者やジャーナリストが，一昔前のバブル崩壊までは，日本の経済システムは世界一効率的であるとさえ言っていたのに，今では，問題の固まりのように言いますが，こういう論調変化も，経済学への不信感を強めていると言えるでしょう。

このようなことを感じた時，皆さんはどのような反応をするでしょうか。「なあんだ，経済学ってさっぱり役に立たないではないか，ますます興味を失った」，あるいは，「そんな難しいこと考え

ず、とにかく、試験のために教科書を覚えておこう」、というような調子でしょうか。しかし、私は、教科書や研究書を読んだ時、ぜひ、皆さんの「現実感覚」を大事にしてもらいたい、と思っています。

経済学のさまざまな命題は、一定の前提条件（人々の行動パターン）のもとで成り立っているものが大半です。そういう前提条件は時代とともに変化します。そして、時代の変化というのは、しばしば、若い世代の皆さんの方が、中高年世代の学者よりも鋭い感覚をもっている場合が多いと思います。人文社会系の学問、特に社会系では、多くの研究業績は年月とともに風化します。中には、風化せずに残るような業績もありますが、そういうものは稀です。

その意味で、若い皆さんは、時代という風を持っていると言えると思います。『論語』に、「後生こうせい畏るべし」という有名な言葉があります。これは中高年世代に向けて、「若者を侮ってはいけない」と諫めた言葉ですが、若い皆さんに対しては、それだけ、自信を持ってよいのだ、という言葉として受け取ることが出来ると思います。講義やゼミでは、ぜひ、自信をもって質問したり、自分の意見を述べたりしてほしい、と思います。と同時に、『論語』は、上記に続いて、「四十五十にして聞こゆることなきは、これ亦畏るるに足らざるのみなり」、と言っていることを忘れてはいけません。「四十歳、五十歳になって世間に少しも知られないようでは、これはまた恐れるに足りない」という意味です。これはいわゆる出世という意味より、年齢とともにその人なりの持ち味が生まれ、周囲の人から一目置かれる、という意味だと理解されています。皆さんには、四十歳、五十歳は、遠い先と思われるかもしれませんが、確実にすぐにやってきます。しっかりと、勉強してください。

2002年4月

大阪市立大学経済学会会長

大 島 真 理 夫